

女性解放とレスビアニズムの間  
— 『番紅花』における女性同性愛言説をめぐって—  
Between Feminism and Lesbianism  
A Focus on Lesbian Representation in *Saffron*

趙 書心  
ZHAO, Shuxin

摘要

In 1914, Kazue OTAKE, a former member of the Seito-sha (The Bluestocking Society), launched a magazine titled *Saffron* (1914-1915). The magazine was a doujinshi (coterie magazine) with six female co-editors, and it was unintentionally discontinued after a total of six issues. Despite its short life span, the magazine carried many works on the theme of lesbianism, which were rare in its contemporaries. In this paper, I analyze three works about female same-sex love in the magazine *Saffron* and discuss the arguments for same-sex love that appear in them in connection with contemporary discourse. Around 1913, when the "new women" symbolized by Seito-sha became a "social concern," the issue of same-sex love among the "new women" was widely covered by the press. These texts deny or reject the physicality of female same-sex love, which was regarded as a problem at that time, and present a new pattern of intimacy as the ideal of same-sex love, which is described as spiritual affection between female intellectuals. Furthermore, the ideal same-sex love was linked to women's liberation, and its social value was found in a positive contribution to the feminist movement. *Saffron's* arguments for same-sex love, which regard it as spiritually valuable, inevitably include the risk of desexualizing lesbianism. However, given the state of discourse at the time when the physical aspect of same-sex was a major issue, it appears to be an unavoidable choice for lesbianism recognition. Although *Saffron* was discontinued after only six issues, its ideals of lesbianism have not ceased. It was taken over by female writers such as Nobuko YOSHIYA through the translation of Edward Carpenter done by *Saffron* members.

キーワード：女性同性愛 『番紅花』 尾竹紅吉 フェミニズム

**Keywords:** Lesbianism, *Saffron*, Kokichi OTAKE, Feminism

## 1. はじめに

1914（大正3）年3月、『青鞥』同人であった紅吉こと尾竹一枝が青鞥社退社から一年余を経て、6名の女性同人（神近市子、小笠原貞子、小林寄津、原信子、松井須磨子、八木麗）を募って、『番紅花』という雑誌を創刊した。発行部数はおよそ2000部程度という同人誌的規模であり、同年8月に通算6号で自然廃刊となった<sup>(1)</sup>。

「純芸術雑誌」<sup>(2)</sup>として創刊されたこの雑誌は、内容が小説、詩、随筆、翻訳と広い文学領域にわたるが、演劇論や海外歌劇の紹介にも誌面を積極的に割いており、演劇誌としての側面もある。森鷗外をはじめ、武者小路実篤、阿部次郎、小山内薫ら、当時一流の文学者たちが寄稿している。とはいえ、中心となった執筆者は、同人6人と、岡田八千代、青山菊栄、菅原初らの女性であり、『青鞥』と同じく「女性の手による雑誌」<sup>(3)</sup>として評価されている。『青鞥』との関係だけではなく、女性史、文学、演劇などの観点からも興味深いにも関わらず、『番紅花』は長い間研究史で等閑視されていた。だが、近年クィア研究が活性化するにつれ、女性同性愛（女同士の親密性）の歴史という文脈においてはじめて研究対象として取りあげられることになった。

「純芸術」<sup>(4)</sup>を標榜した『番紅花』だが、女性同性愛というテーマと深い関わりを持っている。よく知られているように、創刊者である尾竹一枝が『青鞥』時期にその主宰者である平塚らいてうと同性愛的関係にあり、彼女が青鞥社をやめた直接の理由もらいてうとの「同性恋愛」であるという<sup>(5)</sup>。実際、一枝は『青鞥』時期から、その執筆作品に女性同性愛という主題が頻出しており、欠かせないテーマとしてレズビアニズムへの関心があった。『番紅花』にも女性同性愛関連の作品を少なからず載せている。一枝自身の小説のほか、菅原初の小説や同カーペンターの『中性論』なども同性愛というテーマを扱っている。僅か6号しかないこの雑誌は、第2号を除き全冊に同性愛関連の作品が確認でき、同時代の雑誌では稀であった。

女性同性愛が積極的に取り上げられているという点から、赤枝香奈子は従来「過小評価」されてきた『番紅花』を「近代日本におけるレズビアン・サブカルチャーの芽生え」<sup>(6)</sup>として位置づけている。赤枝によれば、大正初期、与謝野晶子と平塚らいてうをはじめとする女性知識人はほとんど母性主義へ傾倒しており、加えて西洋から導入された性科学が同性愛の病理化・タブー化を進めた<sup>(7)</sup>。そうした時代において、女同士の関係を肯定的に表現する『番紅花』は、進行する異性愛の自然化、絶対化に「一石を投じることになる」<sup>(8)</sup>という。

確かに、異性愛の絶対化と同性愛の排除という時代の流れに逆らい、女同士の関係を積極的に表現するところからみれば、「レズビアン・サブカルチャーの芽生え」という評価は妥当である。しかし、先行論では、「レズビアン・サブカルチャー」という用語を使いながらも、『番紅

花』に表象されるレズビアニズムはそもそもいかなるものなのかを明らかにしていない。すでに指摘されたように、大正期前半はセクシュアリティをめぐる言説が氾濫した時期であり、女性同性愛をめぐる認識枠組みも複数存在していた<sup>(9)</sup>。そこで、本稿は、『番紅花』に表象されている女同士の関係の内実に踏み込み、同誌において何がレズビアニズムと認識されたのかを明らかにする。

その際に視野に入りたいのは、女性同性愛をめぐる同時代の言説空間である。同性愛という近代的概念が誕生し、それを問題視する言説が氾濫したのが 1911（明治 44 年）だということはよく指摘されている<sup>(10)</sup>。さらに、『青鞥』を中心とする〈新しい女〉が社会問題となり、同人たちの同性愛問題が新聞に取り上げられた 1913 年前後、女性間の同性愛は再び注目され、メディアを賑わせていた。『番紅花』が同性愛を表現する際に、女性同性愛が再問題化されたこの時期の外部の言説と否応なく対峙しなければならなかったと指摘できるだろう。したがって、ここで重要なのは、『番紅花』がどのような戦略をもって女性同性愛を肯定的に表出したのかを問うことだと思われる。

以上の問題意識を抱えつつ、本稿は、「レズビアン・サブカルチャーの芽生え」<sup>(11)</sup>という従来の評価を踏まえ、『番紅花』を再考察することを目的とする。具体的には、『番紅花』に掲載されている女同士の親密性を表象した作品を、1913 年前後女性同性愛をめぐる言説空間において考察し、同誌が主張するレズビアニズムはいかなるものか、それを打ち出すためにどのような戦略をもって外部の言説と交渉していたのかを明らかにする。このような分析を通して、大正期の同性愛言説に対する『番紅花』の位相を解明し、その歴史的意義を見直したい。

## 2. 『番紅花』の創刊と尾竹一枝

『番紅花』は同人誌であるが、「思いつき要素の多い個人誌的性格」<sup>(12)</sup>をもっており、とりわけ創刊の事情が尾竹一枝その人に決定的にかかわる。内容の分析に踏み込むまえに、まず創刊経緯を辿り、同誌の性格をより明確にしておく。

周知のとおり、『番紅花』の創刊には尾竹一枝の青鞥社退社という背景がある。1912 年後半から、吉原登楼、五色の酒などのスキャンダルが問題化し、青鞥社に対するジャーナリズムの攻撃が始まった。一枝は一連のスキャンダルを起こした「責任者」として社内外の非難にもさらされた。加えて、平塚らいてうとの同性愛的関係もこの時期に破綻に陥り、らいてうと若い男性画家奥村博との恋愛によって壊されたのである。世間の非難と愛の喪失に直面した一枝は、同年の 11 月に「卑劣な行為を作り上げた」「私は青鞥社を退社致す」<sup>(13)</sup>という言葉を残し、引責退社という形で『青鞥』を去った。『青鞥』最後の作品において、一枝は「赤裸な人世の前に

「生肝とられた子供」<sup>(14)</sup>と自身を表現しており、一連の事件に深く傷めつけられた姿がうかがわれる。

しかし、『青鞥』を去った一枝は、ジャーナリズムから消えることなく、他の雑誌に活動の場を広げ、「新しい路を切り抜かうとし努力し」ていた<sup>(15)</sup>。退社から『番紅花』創刊までの作品には、一枝の傷つけられた自己の再生／回復へ模索する軌跡が窺える。退社直後には、らいてうの愛を失った悲しみを語るものが作品の大半を占める<sup>(16)</sup>。だが、東北、北陸への長期にわたる一人旅などを経験した半年後、希望と明るさを匂わせる作風が変わっている。この時期の作品から、過去の自分と訣別し、新しい生活を築くという一枝の再生の意志が端的に見える。一枝は「なまけ者」<sup>(17)</sup>であった過去の自分を省み、「自分に大なる責任あることを感じ」<sup>(18)</sup>、これから「自己の天才を充分に発揮し」<sup>(19)</sup>たいという自己実現の意欲を率直に表明している。また、それを目指して、「仕事がうんとしたい」<sup>(20)</sup>と心を固め、「暫時」放置されていた「絵の事」に専念し<sup>(21)</sup>、さらに「雑誌を出したい」<sup>(22)</sup>と思案していたのである。このような語りの端々からみられるように、彼女がたどり着いた自己再生の方途とは、仕事を通して自己実現を果たすということであった。

こうした一枝個人のいきさつ、とりわけ「仕事」を通して自己実現をはかるといふ思いが『番紅花』の性格に多大な影響を与えた。「お互ひの仕事を」「理解仕合つてゐる人だけが集つてお互ひ勉強して自分を育てあつてゆこう」<sup>(23)</sup>という創刊目的が示すように、仕事意識と女性の自己実現が『番紅花』の重要な主題となっている。雑誌全号を眺めると、仕事につく女性や職業におけるジェンダーの問題を扱う作品が頻出しているのも、こうした同誌の特徴を端的に示している。代表的作品としては、「私は生きてゆかねばならない／私の命をもって私の仕事もしなげりやならない」「私の仕事、私の成長、私の生活／私はこの上に絶対な命を求めてゐる」と仕事と自己実現の意志を謳う一枝の詩「私の命」<sup>(24)</sup>や、俳優業における「女子蔑視の思想」<sup>(25)</sup>を批判する松井須磨子の「最近の不平」などがある。ほかに家の桎梏から逃れ自活する女性を書く八木麗「別れの手紙」などの小説<sup>(26)</sup>も挙げられるが、とくに注目に値するのが毎号に載っている「海外通信」である。森鷗外によって書かれたこの通信欄では、職業やファッションなど海外の女性事情が幅広く紹介され、さらには婦人参政権運動に関する速報にも紙幅が割かいる。

このような『番紅花』の誌面からみれば、性愛や家族といった私的領域の問題から女性解放を目指した『青鞥』<sup>(27)</sup>とは異なり、仕事を通して女性の自己実現を追求する同誌は、公的領域への参加によって女性解放を模索する雑誌といえよう。「純芸術雑誌」としての側面の外に、

新しい方向で女性解放を志向するという『番紅花』の性格を見落としてならないと思われる。次節では、こうした雑誌の性格を踏まえ、女性同性愛表象の考察に立ち入る

### 3. <新しい女>の問題化と女性同性愛言説の変容

具体的な作品分析に入るまえに、まず『番紅花』発刊当時の女性同性愛をめぐる言説状況を整理しておこう。大正期の女性同性愛が論じられる際、しばしば言及されてきたのは1911年女性同士的心中事件をめぐる言説である。同年7月、新潟の海岸で女学校卒業生同士による心中事件が起き、盛んに報道された。この事件は、「同性愛」という近代的概念が登場する過程におけるターニングポイントとなり<sup>(28)</sup>、女性同性愛の「発見」を象徴する出来事だった<sup>(29)</sup>。赤枝が指摘しているように、同事件をきっかけに、女学生間の親密性を問題化する言説が氾濫し始め、そこには女性同性愛を「友愛／肉欲」との二つに分類する認識枠組が浮上した<sup>(30)</sup>。

しかしながら、従来の研究では、1911年の言説が注目されるあまりに、その後の変容が見過ごされている。『番紅花』創刊前年の1913年前後、<新しい女>の社会問題化をきっかけに、女性同性愛の問題は、再びメディアを賑わせた。1912年7月から、同人たちが起こした「吉原登楼」「五色の酒」などスキャンダルによって、『青鞥』が<新しい女>の集団として社会の非難を浴びており、その中で、一枝と平塚らいてうの同性愛問題もメディアに大きく取り上げられ、揶揄の対象となる。これを口火に、女性同性愛という現象が注目され、それに関連する新聞記事の数もピークを迎えた。「一時下火に見えたる」「同性愛の流行」が「近頃に至り再び復活し来たり」<sup>(31)</sup>と1913年の記事が述べているように、女性の同性愛は再問題化されたのである。

1913年の女性同性愛言説を辿ると、1911年のそれとは大きく変わったことが見受けられる。まず確認されるのが、同性愛を純粋な「友愛」とみなす言説は見えなくなり、代わりにそれを「肉欲的な」「墮落関係」とする言説が主流となっていることである。<新しい女>は「女子教育の一畸形児」という理屈で、教育面から女学生の「墮落」を憂慮する言説も浮かび上がってきたが、墮落の原因の一つとして「同性の恋」を挙げている<sup>(32)</sup>。そこにおいて、同性愛は純然たる友愛ではなく、身体的関係を伴う危険な関係として認識された<sup>(33)</sup>。また、一枝と平塚らいてうの同性愛を書く記事においても、二人の関係が性的関係として捉えられている。例えば、らいてうと紅吉の同性愛を描く『東京日々新聞』の連載記事「妙な恋」は、始めかららいてうのことを「禅僧中原と恋仲になった」り、森田草平と「怪しげな旅館」に行ったりする、一連の性的スキャンダルを起こした「色情狂」として紹介し、そのような文脈で紅吉との同性愛を「變性の恋」と揶揄している<sup>(34)</sup>。

上記の言説のほかに、この時期に新しい種類の同性愛認識が浮かび上がったのも注目すべきである。この種の言説では、当事者の女性が「中性」と名付けられ、異性化した女性として社会問題化されている。『青鞥』のスキャンダルを最初に報道した『萬朝報』は、その翌月に「近ごろに女が女を愛する」という「問題」を取りあげ、分析を行った末、「働く女」や「動的自覚的な女」など「男化した女」、すなわち「男ならず女ならぬ中性の一階層」の出現が原因であると説く<sup>(35)</sup>。それ以後、「中性」という同性愛認識がしばしば新聞記事に現れるようになる。ここで興味深いのが、当事者間の「墮落行為」に着目する上記の言説と異なり、「中性」をめぐる言説はいわば同性愛を「種族」<sup>(36)</sup>化であり、当人の身体的素質がもっぱら焦点化されていることである。たとえば、「中性」の女性は「実に立派な体格を有し」「其の行動も異性のやうだ」<sup>(37)</sup>、あるいは「筋力的にも精神的にも強し」「有ゆる遊戯、有ゆる冒険に於て」「男性と相角逐せんと欲す」<sup>(38)</sup>と説明されるように、身体の男らしさが強調されるのである。「中性」という言葉は当時生殖機能を持たない種を指す生物学用語として使われていた<sup>(39)</sup>が、それを同性愛者に転用したといえ、ここにはある種の病理学的な視線がうかがえるだろう。実際、これらの言説には、ハヴロック・エリスなどの性倒錯理論の援用がしばしばみかけられ、当時流通し始めた性科学による影響が濃くみえる<sup>(40)</sup>。

以上をまとめれば、この時期の特徴として、二つの点が指摘しうる。ひとつは、同性愛という現象が<拡大>したことである。同性愛を女学生という階層に限定されるものとする1911年の言説に対し、この時期の言説には、女学生だけでなく成人女性、とくに知的階層の女性が同性愛の当事者としてカテゴライズされたのである。もう一つは、身体性の問題が中心化されたことである。身体的関係を問題視するにせよ、同性愛を身体の異性化と解釈するにせよ、女性の性的身体が注視的となっていたのである。

#### 4. 『番紅花』に見られる同性愛認識

さて以上を同時代の状況として押さえたうえで、『番紅花』における同性愛表象について考えたい。同誌では女性同性愛関連の作品が5つ確認される<sup>(41)</sup>。少女間の同性愛を描く1巻3号の小説「Cの競争者」を除けば、繰り返し語られているのは、新しく可視化された知的階層の女性の同性愛が。そこでこれらの作品の特徴を抽出していくが、結論を先取りすれば、『番紅花』では同時代に流通していた同性愛認識が否定され、それとは異なる新しい親密な関係が挙げられている。その中から、本稿では女性の同性愛関係を正面から扱う「自分の生活」、「中性論」、「動揺」という3つの作品を取り上げる。まずは創刊号に掲載されている尾竹一枝「自分の生活」<sup>(42)</sup>をみていく。

一人称書簡体をとる「自分の生活」は、一枝と考えられる語り手「私」が、女性の恋人である「俊子」を宛先に、破綻に瀕している二人の関係を見直すために綴られた手紙である。そこにおいて、「私」は愛にたいする考えの齟齬が二人の関係をつまづかせたと説き、「愛と云ふ意味をあまりに遊戯的に考へてゐる」(193頁)と俊子を咎め、お互いに「真当の愛」(195頁)を追求すべきだと言ひ聞かせる。

本作について、従来の研究は「女性同士の関係の復権」<sup>(43)</sup>「愛情への希求」<sup>(44)</sup>と解釈しているが、ここで注目したいのが、二つの対照的な同性愛表象が描かれていることだ。一つは俊子が求めている「遊戯的な愛」であり、もう一つは「私」が理想とする「真当の愛」である。そして、前者は「妙な破壊性や危険性」(208頁)をはらむものと否定され、後者は「確かな生活」(213頁)と「真実な生命」(214頁)を支える愛として位置づけられているように、二つの同性愛表象はネガとポジの関係にあり、女同士の親密性は分節化され、階層づけられるのである。それでは、二つの表象の内実はいかなるものであろうか。まず、「遊戯的な愛」の描写として、俊子に対する「私」の批評をみていく。

かつてあなたは私にこんなことをいつた。

「あなたは私をちつとも可愛がてくれないですもの、つまらなくてたまらない」(中略)  
俊ちゃん、あなたは「可愛がられる」と云ふことによつて、愛したり、愛されたりして、相互が愛の交渉をもち続けてゐるのだと思ひますか、勿論大ざつぱに云へばさうなるかも知れませんがともするとその可愛がると云ふ言葉は遊戯的衝動になり易いのです。(196頁；下線引用者)

そのために、いつもの様に、私の胸にしつかりあなたをかき抱いて沁々あなたと話をしたこともないし、いたづらをして俊ちゃんをからかつたりしてゐる時間もなかつたのだ。俊ちゃんは、きつとそんなことが気にさわつてゐたんだろうと私は考へる。(198頁；下線引用者)

引用において、「私」は自分に対する俊子の愛を、「かき抱かれ」「可愛がられる」という身体的な接触を伴うセクシュアルな欲望として表現しており、その欲望を「遊戯的衝動」として正当の「愛の交渉」と差異化している。この記述からみられるように、「私」が「遊戯的な愛」として俎上に載せるのは、身体性に基づくセクシュアルな関係である。さらに、そうした「遊戯

的な愛」をより明らかに「説明しやう」とするために、「私」は過去の同性愛体験を省み、次のように記述している。

愛を遊戯的に考へてみると今は私があなたとがめではゐますけれど私がかつてあなたをまだ見知らぬときある一人の人にひどく愛されてゐたことがありました。(中略)

その人はよく葡萄酒を口うつしにしてくれました。あの人の唇から私の幼い唇にそれをそそがうとして私をしつかり抱いてくれたときなんか私は真赤になりました、そして嬉しくてたまらなかつたものでしたよ。(中略) 私は身体をもがいたり、そして逃げやうとしたりしてゐるものの、その実は全くうれしかつたです。

私はそんな事にばかりぶつかつてゐると云ふとどが眞<sup>ま</sup>当<sup>ま</sup>の愛だと思つてゐたんです。

今から考へてみると馬鹿馬鹿しいふざけ方ですけれどね。(193-194頁；下線引用者)

「遊戯的な愛」の「例」として描き出されたこの記述において、「私」が「眞<sup>ま</sup>当<sup>ま</sup>の愛」と思つていたかつての同性愛体験<sup>(45)</sup>を、「馬鹿馬鹿しいふざけ方」にすぎなかつたと自省している。そして、前掲した箇所と同じように、「馬鹿馬鹿しいふざけ方」として提示されているのが「葡萄酒を口うつしにして」「身体をもがく」というセクシュアルな関係である。さらに回想を終わらせたあと、「私」はこうした関係に陥つたのが自分自身の「勢<sup>ま</sup>力<sup>り</sup>や生活」を浪費することにすぎないと反省し、「遊戯的な愛」を「自分の成長」を妨げるものとして捉えている。

セクシュアルな関係を切り捨てるべき「遊戯的な愛」と捉える一方、「私」はそれとは異なる親密な関係、すなわち「眞<sup>ま</sup>当<sup>ま</sup>の愛」を求めると俊子をたしなめている。

私も、今迄人を愛すと云ふことに依つての方法や手段をすつかり間違へて来てみました。(中略)

とにかく私とあなたは深い愛着から一度二人のもとあつた場所に戻りあつて、二人が二人ともまだみなかつた過ぎた時に戻つてみてそしてそこでお互の眞<sup>ま</sup>実<sup>じ</sup>の生命に鋭い批評を加へて、私もあなたもそこで眞<sup>ま</sup>実<sup>じ</sup>の二人自らのもつてゐる生命に触れなければいけないと思ひます。(214頁：引用者)

「眞<sup>ま</sup>実<sup>じ</sup>」の「生命」に触れあうという精神性を重視する関係こそ、追求すべき「眞<sup>ま</sup>当<sup>ま</sup>の愛」と位置づけられている。さらに注目すべきなのは、こうした「眞<sup>ま</sup>当<sup>ま</sup>の愛」が仕事と自己実現を追求する『番紅花』の女性解放思想と結びつけて表象されているということだ。テキストの後



半において、「私」「これから先ず」「私の生活を求めなければならない」(211 頁)、「更に堅実な新しい私の成長、私の仕事、私の生活、私の生命の創造を求めなければいけない」(214 頁)と自己実現の欲求を繰り返して語り、そこで「愛してゐると云ふことには、私の仕事をも尊敬してゐてくれるものだと思ひ」(210 頁)、「双方が双方の生活と仕事と双方の人間を尊重しあはなければ、そこに絶対な完全な、私はあなたを愛してる」(211 頁)ということが成立しないと述べている。つまり、お互いの仕事や自己実現の欲求を承認し合うのが「真当の愛」の前提になっており、言い換えれば、「私」に理想とされる同性愛は女性解放の理想につながるものとして位置づけられている。

以上の対照的な同性愛表象から確認したように、「自分の生活」では、身体性に基づくセクシュアルな欲望は「遊戯的」で劣ったものとされ、女性間の精神的なつながりを女性解放の理想に寄与するものとして昇華される。ここで前述した女性同性愛をめぐる同時代言説に照らし合わせてみれば、同性愛を性的関係として問題化する当時の同性愛認識が本作にある程度受け入れられたようである。しかし、そうした性的関係はただちに正当な同性愛から排除され、女性解放に連なる新たな親密な関係、すなわちインテリ女性による精神的なつながりがあるべき同性愛として提示されているのである。こうした同時代言説との関係性から、同時代言説に逆らい女性の同性愛を擁護する『番紅花』の姿勢は勿論、擁護するための『番紅花』の独自の戦略も見出せるだろう。つまり、正面から反論するのではなく、女性同性愛というカテゴリーに、新しいバリエーションを追加することで、女同士の親密性を再編するという戦略が展開されたのである。創刊号以後に掲載されている作品も、主としてこうした同性愛認識を踏襲し、新規のバリエーションである精神的な同性愛をさらに形象化し、正当化する方向へ模索していく。

## 5. 精神的な同性愛の形象化

創刊号における一枝の作品のほか、とりわけ注目したいのが第4号と第5号に連載されている菅原初の「動揺」<sup>(46)</sup>である。菅原初は無名の書き手であるが、『青鞥』にも女同士の関係を題材とした同じ趣向の小説「旬日の友」を寄稿しており、一枝と同様に女同士の親密性というテーマに深い関心をもつと思われる。まず物語の内容から確認していく。東京の学校を卒業した主人公美津は、職を得るために東京を離れ、地方の学校で教員として働いている。しかし、読書家である美津は、教員の仕事を生活の糧を得るための職業と割り切り、「書くこと」こそを「自分の仕事」(4号、42頁)と定めている。そのため、彼女は業務に忙殺され、中々「自分の仕事」が進まない現在の生活に倦怠を覚え、友達と文学談で夜を徹するかつての東京生活を懐かしむ。「どうかして都に生きたい。思ふ存分に自分の仕事が見たい。自分の仕事に生きて

あるやうになったならどんなに」(4号、47頁)と書いてたまらないのである。そのような美津のもとに、地方の学校教員として、自分と同じ葛藤をもつMや東京で文芸に従事しているKなど、学生時代からの一群の友人がいる。倦怠の日々を送る美津には、友人たちとの交流が唯一の慰めになっている。美津に寄り添った三人称で描かれたこのテキストは、こうした美津と友人たちとの交流を描くものである。4号ではMという友人との文通と再会が中心となり、5号の続編ではKやSとの再会が描かれている。

あらすじからみて取れるように、本作に特徴的なのは、複数の女性間の関係が描かれているということである。恋愛を排他的なモノガミーの関係とする近代の性愛規範で測れば、本作に表象されている関係性は恋愛というより友情のように見えるかもしれない。しかし、彼女たちの関係性の内実に踏み込んでみると、そこには単なる友情に収まらない要素が含まれている。例えば、美津とMの関係が描かれている前半において、二人の関係性が一種の「ロマンス」(4号、62頁)と呼ばれ、「音づれない時でも、離れてある時、恰も相接している時と少しも変わらぬ心持が通つてゐる」(4号、60頁)と表現されており、友情以上のロマンティックな関係性で見受けられる。また、美津にとってそれは職場での「つまらな」い「世間的な」友情とは異なり、お互いの「霊」が触れ合い、「内的生活」(4号、43頁)をかち合うことができる真の交流である。さらに、二人が再会する場面では、美津がMを「私の好きな友達」「敬愛しているあなた」(4号、54頁)と呼び、Mとの関係を「ダンヌンチオの死の勝利」(4号、53頁)に描かれた情熱的な恋愛に喩えている。つまり、彼女たちの関係は高い精神性を伴うロマンティックな関係として一般的な友情と差異化されているのである。

KとSとの交流を描く後半のテキストにおいては、こうした精神的なつながりはさらに女性のエンパワーメントに昇格される。たとえば、Kとの再会の場面では、二人が「これからの希望や仕事の計画」を語り合い、「一直線に自分の仕事に進み得る」Kを見て美津はそれが「羨まし」く「頼もしい」と思い(5号、120頁)、一方自分の話を「快く聞いて」くれたKにも「力付け」られた(5号、121頁)と描かれている。女同士の絆は女性の自己実現を力付けるものとして表象されているのである。さらに言えば、「嘗て自分と同じ思想に、同じ傾向を有った友達が或は人の妻となり、母となり、家庭に執着して遠ざかりつつある」(4号、58頁)なか、「自分の仕事」に生きようとする互いを力付け合うような彼女たちの関係は、家父長制に抵抗する女性の共同体ともなっていると言えるだろう。

本作に描かれている女同士の絆を『番紅花』という場において見つめ直すと、こうした精神性重視のロマンティックな関係は、前述した「自分の生活」に描かれている精神的な同性愛を彷彿させるものでもある。「思ふ存分に自分の仕事をして見たい」(4号、47頁)美津やMは、

正に『番紅花』にあげられた女性解放思想を体現する人物であり、「内的生活」を「分ち合」い、互いを力付け、承認し合うような彼女たちの関係は「自分の生活」に提示されていた、「真実」の「生命」に触れあうような「真当の愛」に一致しているようにみえる。これを踏まえると、本作は「自分の生活」で主張された精神的な同性愛を形象化するテキストと言えるだろう。

それでは、『番紅花』的な同性愛認識を形象化した本作は、同時代言説に問題化されていた身体的関係をどのように扱っているのか。本作では、セクシュアルな欲望が明確に否定されていないが、身体的な関係への言及を極力避ける傾向が見受けられる。前述したように、Mとの再会を描く場面では、美津がMを「敬愛しているあなた」と呼び、さらにMに対する思いを「ダンヌンチオの死の勝利」における情熱的な恋愛に喩えている。しかし感情の強烈さと裏腹に、二人の身体的接触が「握手」ととどまる程度のもので、「自分の生活」に描かれているような抱擁や接吻などの描写が見当たらない。身体的行為による愛情の表出が抑えられているのである。

このように、「動揺」は創刊号にみられる同性愛認識を引き継いだテキストと認められる。そこにおいて、女性の同性愛は身体的関係と遠ざけられ、女性の自己実現に連なる精神性重視の関係として形象化されているのである。次節では、青山菊栄<sup>(47)</sup>に翻訳されたエドワード・カーペンターの「中性論」を読み、カーペンターの思想をもって同性愛の社会的承認を求める『番紅花』の試みを明らかにする。

## 6. 同性愛の社会的承認を求めて

第3号から第5号にかけて連載している「中性論」<sup>(48)</sup>は、カーペンターの単著 *The Intermediate Sex: A Study of Some Transitional Types of Men and Women* (1908) から訳したものであり、原作は同性愛の社会的意義を主張する先駆的な性科学著作である。日本におけるカーペンターの受容などは、Sarah Frederick と Michiko Suziki による詳細な考察に譲る<sup>(49)</sup>。本節では、ここまでの考察を踏まえながら、「中性論」を訳す『番紅花』の意図と、同時代言説に対する同作の位相を分析したい。まずカーペンターと「中性論」の内容について簡単に述べておく。

「中性論」の著者であるエドワード・カーペンターは、イギリスの著名な社会主義者であるが、同性愛を擁護する言論活動をも行い、20世紀初頭同性愛解放運動の担い手とも言われている<sup>(50)</sup>。同作において、彼は当時男性間の性行為を犯罪化する法を批判の対象とし、同性愛を正当化する方向へ論を展開した。カーペンターによれば、同性愛者は「病的」ではなく、「通常の男女とは肉体の構造上何等の差異もない」<sup>(51)</sup>。彼らは「男女両性の資性を兼備する」、すなわち「中性的気質」の人であり、彼等の愛情も一般に思われるより遥かに「精神的」である<sup>(52)</sup>。

その気質のゆえに、彼らは社会的、文化的な事業に従事するのにふさわしく、人類の発展に大いに貢献できるという<sup>(53)</sup>。

さて、『番紅花』は何を意図して「中性論」を掲載したのであろうか。先に述べたように、同性愛の脱犯罪化のために書かれた「中性論」は、同性間の性行為を罰するイギリスの刑法<sup>(54)</sup>という明確な批判対象を持っていた。そのような法律が存在しなかった日本では、同性愛の脱犯罪化という意図から「中性論」を訳したとは考えにくい。同作において、カーペンターが繰り返して同性愛の精神性を主張しているという点からみれば、青山はおそらくこの観点に共鳴していると思われる。編集後記における「中性論」への言及もこの推測を裏付ける。

何時か青山さんとお逢ひした時に同性恋愛の話が出た。その時にカーペンターの説によると同性恋愛は異性間のそれよりはもつと精神的なものでそれを善い方面に導けば一方がほかをどんなに感化誘導してゆけるものだなど云ふことが有つて、大変面白い見解があるとのことであつた。(55) (下線：引用者)

また、つづく記述から、「中性論」の翻訳は当時同性愛が再問題化されていたという社会背景にも関連しており、同時代の議論に触発されたためだと考えられる。

殊に中性の男女は近頃日本にもボツボツ表面に現はれて来て一部の人々の間に一問題となつて居る。今カーペンターのそれについての研究を見せて貰ふことは可成興味のあること々思ふ。(56) (下線：引用者)

引用のように、カーペンターの研究は「中性の男女」に対する「一部の人々」の認識を更新しうるものとして、つまり時流通していた同性愛観に対抗する意図から『番紅花』に取り上げられたと窺えるだろう。同作の内容からみれば、カーペンターの主張は当時の同性愛言説を覆す可能性を十分に有するといえる。まず同性愛を性的墮落とみなす言説に対して、「中性論」は精神的なつながりこそ同性愛関係の中核であると述べ、それは新しい社会を実現するための絆と位置づけている。一方、男性性／女性性の問題に関しては、同作は精神医学における性倒錯理論を相対化し、「中性者」は「肉体の構造又は体質には何等の変態的或は病的な点の見えぬ」<sup>(57)</sup>と論じる。同性愛を身体的変質と切り離すという点においては、カーペンターの思想は当時の日本の同性愛認識への対抗言説として機能していると指摘できるだろう。

対抗言説として機能するという理由以外、女性へのカーペンターの関心も『番紅花』の同人たちが共鳴し得る大きなポイントと思われる。イヴ・セジウィックが指摘しているように、20世紀初頭の同性愛解放論者のなかでは、カーペンターは「フェミニスト的立場」<sup>(58)</sup>によって特徴づけられる。セジウィックによれば、当時の同性愛論者のほとんどは女性を「優生学的な見地」<sup>(59)</sup>からしか見ておらず、「現実の女性たちの政治的立場に対する関心」<sup>(60)</sup>も持たないのに対し、カーペンターは「女性たちの権利獲得のためにはゆるぎない信念をもって活動」<sup>(61)</sup>し、同性愛議論において「男性に対するのと同じくらい熱心に女性を分析した」<sup>(62)</sup>という。「中性論」に目を向けると、女性解放運動、とくに運動にみられる女同士の連帯に関して、積極的な言及が確認できる。そこにおいて、カーペンターは「婦人運動は婦人に「男子の猿真似」をさせる埒もない計画に過ぎない」という女性運動への「咎め立て」を「無智な」「偏見」「讒誣」と批判し、女性解放への支持を示している<sup>(63)</sup>。その上、「婦人の自由解放の運動」に「献身的な」「同性恋愛」を見出し、女性解放を実現させる「熱烈な恒久な力」と評価している<sup>(64)</sup>。女性同性愛を主として性倒錯と解釈している20世紀の性科学において、こうしたカーペンターの理論は独特である。なぜなら、彼が性的身体に限定されない欲望を描き出し、さらに女性解放との結びつきにその社会的価値を見出しているからである。ここで前述した女性同性愛の文学表象を振り返ってみると、「中性論」の主張がそれらの文学表象と相互に呼応する関係にあるといえる。この点を踏まえると、『番紅花』は女性同性愛をめぐる独自の主張に正当性を付与する理論として、「中性論」を持ち出したと推測できるだろう。

1914年当時、カーペンターはすでに先駆的な思想家、社会主義者として日本に紹介されていた<sup>(65)</sup>。名高いカーペンターの理論をもって、独自の主張を正当化する『番紅花』の試みは意欲的といえるだろう。従来の研究において、『番紅花』では「中性論」が取り上げられたことは、「単なる偶然であるかもしれない」と述べられている<sup>(66)</sup>。しかし、以上に確認したように、それは「単なる偶然」ではなく、女性同性愛の社会的承認を求めるための戦略であったと考えられる。

さらに「中性論」の受容状況について付言しておく。1919年に青山訳の「中性論」は「同性の愛」と改題した上で、堺利彦訳のレスター・ウォード「女性中心説」と合わせて『女性中心と同性愛』（アルス）として出版された。ウォードの「女性中心説」は、進化論的な現地から、女性の地位を主張する社会学著作であるが、当時社会主義婦人解放論という文脈において受け入れられた<sup>(67)</sup>。「女性中心説」とセットにして出版されたという経緯からみると、カーペンターの「中性論」は、性科学だけではなく、女性解放にもつながる理論として受容されていたとわかる。Suzukiの考察によれば、単行本として出版された「中性論」は比較的広く読まれ、とり

わけ知識人女性に歓迎されていたという<sup>(68)</sup>。たとえば、山田わかは著作『恋愛の社会的意義』（東洋出版社、1920）で「中性論」を詳細に紹介しており、神近市子と古屋登代子も同性愛を擁護する論においてカーペンターの主張を援用している<sup>(69)</sup>のである。また、Suzukiが指摘しているように、「中性論」の読者のうちでとくに注目し値するのが吉屋信子である。戦前期に女同士の親密な関係を書き続けた吉屋は、女性同性愛文学の先駆けとして位置づけられているが、このような彼女の同性愛認識と創作活動には、カーペンターの思想、とくに同性愛の精神性を称賛する思想が多大な影響を及ぼしたという<sup>(70)</sup>。こうした指摘からみれば、同性愛の社会的承認を求める『番紅花』の先駆的な思想は、間接的ながらも後の時代に影響を与えたといえるだろう。

## 7. おわりに

以上のように、本稿では雑誌『番紅花』における女性同性愛関連の三つの作品を分析し、そこに現れる同性愛をめぐる主張を抽出し、同時代言説との関係性を論じた。これまでの研究において『番紅花』は「日本のレズビアン・サブカルチャーの芽生え」<sup>(71)</sup>として評価されてきたが、同誌におけるレズビアニズムの内実が明らかにされていない。本稿の作品分析を踏まえると、『番紅』におけるレズビアニズムは知的階層の女性における精神性重視の同性愛だったと考えられる。まず、創刊号の小説「自分の生活」では当時問題視されていた身体的な同性愛が否定され、新たな親密性、すなわち女性間の精神的な支えあい「真の同性愛」として位置づけられた。以後、このような精神的な同性愛は連載小説「動揺」において女性の自己実現と結びつけて形象化され、さらに翻訳「中性論」では女性解放に寄与する、社会的価値のあるものとして正当化されたのである。

『番紅花』の同性愛主張は精神的なつながりに価値をおくがゆえに、必然的に同性愛を脱性化する危険性を含んでいる。しかし、女性同性愛における身体性の側面が大いに問題化されていた当時の言説状況を勘案すれば、それは同性愛の承認のためのやむをえない選択とも思われる。僅か6号をもって廃刊になっているが、『番紅花』の同性愛思想は、後が絶えたわけではない。それはカーペンター「中性論」の翻訳という仕事を通して、吉屋信子などの同性愛擁護の知識人女性に引き継がれた。

『番紅花』におけるレズビアニズムと、レズビアンという言葉の現在の意味づけ、すなわち性的指向としての「同性愛」や「レズビアン自認」との間には確かに差異が存在している。しかし、『番紅花』の歴史的意義がまさにその差異にあると思われる。というのは、同性愛は歴史や文化を超えた固有な特性を持つわけではなく、その意味づけが常に変容しながら生産され続けるからだ。現在の枠組みから女性同性愛を一義的に捉えるのではなく、過去の実践からその

多様性と可変性を含んで考察するのが重要であり、その意味で『番紅花』は女性同士の関係の一形態を示す貴重な歴史的テキストとして再評価されるべきである。

## 注

- (1) 渡邊澄子『青鞥の女・尾竹紅吉伝』、不二出版、2001.3、p.105
- (2) 「編集室にて」『番紅花』1 (1)、1914.3、p.224
- (3) 渡邊澄子「解題」『『番紅花』解題・総目次・索引』不二出版、1984、p.5
- (4) 同注 2
- (5) 黒澤亜理子「女性芸術誌『番紅花』と尾竹一枝」『彷徨月刊』185、2001.1、pp.14-16
- (6) 赤枝香奈子『近代日本における女同士の親密な関係』角川学芸出版、2011.2、p.74
- (7) 同上、p.74-75
- (8) 同上、p.74
- (9) 古川誠「セクシュアリティの変容：近代日本の同性愛をめぐる3つのコード」『日米女性ジャーナル』17、1994.12、pp.29-55；肥留間由紀子「近代日本における女性同性愛の「発見」」『解放社会学研究』17、2003、pp. 9-32
- (10) 同上
- (11) 同注 6
- (12) 同注 3、p.9
- (13) 尾竹紅吉「群衆のなかに変ってから」『青鞥』2 (11)、1912.11、pp.95-99
- (14) 尾竹紅吉「冷たき魔物」同上、pp.104-108
- (15) 富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』20 (2)、1935、2、p.87
- (16) 「断章五つ」『黒耀』1 (3)、1912.12、pp.11-14；「匿されたるわが心」『黒耀』2 (1)、1913.1、p.58；「穢き頃の扉」『黒耀』2 (1)、1913.1、pp.97-120
- (17) 「なまけ者」『新公論』28 (10)、1913.10、pp.173-176
- (18) 「迷信かもしれない」『新真婦人』3、1913.7、p.25
- (19) 同上
- (20) 同注 16
- (21) 「お々佐渡ヶ島」『東京日日新聞』1913年8月26日
- (22) 同注 17
- (23) 同注 2、pp.223-224
- (24) 尾竹一枝「私の命」『番紅花』1 (1) 1914.3
- (25) 松井須磨子「最近の不平」『番紅花』1 (4)、1914.6
- (26) 八木麗「別れの手紙」1 (4) 1914.6。職業につく女性を書く小説として、ほかには神近市「序の幕」1 (1) 1914.3、神近市「N氏のマニユスクリプト」1 (4) 1914.6、菅原初「免職の日」1 (6)、1914.8などがあげられる。
- (27) 牟田和恵「良妻賢母」思想の表裏：近代日本の家庭文化とフェミニズム」青木保他編『女の文化』岩波書店、2002.2、p.42
- (28) 古川誠「同性「愛」考」『imago』6(12)、1995.11、pp.201-207
- (29) 肥留間由紀子、同注 8
- (30) 同注 6、pp.102-118
- (31) 「時評：同性愛の事実頻々」『太陽』19 (8)、1913.6、p.31
- (32) 「女子墮落の原因」『朝日新聞』1912年10月28日；「帝都の書生(十二)」『朝日新聞』1913年10月30日；「戦慄すべき女学生墮落の径路」『婦人画報』75、1912.11、pp.20-28；「女学生(一) — (十六)」『朝日新聞』1913年2月28日-3月24日。
- (33) 同上
- (34) 「妙な恋(一) ~ (十)」『東京日日新聞』1912年11月29日-12月9日
- (35) 「驚く可き男女の変化」『萬朝報』1912年8月30日。
- (36) ミシェル・フーコー著、渡辺守章訳『性の歴史 I: 知への意志』新潮社、1986.9、p.56。
- (37) 「男女の未来」『萬朝報』1912年9月6日
- (38) 「第三性」『読売新聞』1912年11月24日
- (39) 斎田功太郎『自然科学(上)』博文館 1909.10、p.272

- (40) 澤田順次郎「科学より見たる男女の秘密」『新公論』28 (1)、1913.1、pp.12-19；よしらし草「夕陽丘女学校校長との対話：尾竹紅吉の在校時代、男女中性の新問題」『女子文壇』9 (1)、1913.1、pp.81-83
- (41) 従来の研究で『番紅花』掲載の同性愛関連作品がリストアップされていないが、小説4つ（尾竹一枝「自分の生活」1(1)、尾竹一枝「Cの競争者」1(3)、菅原初1(4-5)、八木麗「C夫人の或る朝」1(6)）、翻訳1つ（青山菊枝「中性論」1(3-5)）が確認される。本稿はなかの3つを分析するが、残りは紙幅の関係上、別稿に譲る。
- (42) 『番紅花』1 (1)、1914.3、pp.189-216。以下「自分の生活」の引用は、注を省略し括弧の中にページ数を記す。
- (43) 同注 6
- (44) 同注 5
- (45) 黒澤亜里子の指摘によれば、この同性愛体験とは『青鞥』時期にあった平塚らいてうとの同性愛である。（同注 5）
- (46) 「動揺」『番紅花』1 (4)、1914.6、pp.40-64；「動揺（承前）」同前 1 (5)、1914.7、pp.110-136。以下「動揺」の引用は、注を省略し巻号とページ数を括弧に記す。
- (47) 山川菊栄（1890-1980）；高等女学校在学中（1902年）から1916年までに、一時青山姓をなっていた。
- (48) 『番紅花』1 (3)、1914.5、pp.1-22；1 (4)、1914.6、pp.130-153；1 (5)、1914.7、pp.55-76。
- (49) Sarah Frederick, “Yamakawa Kikue and Edward Carpenter: Translation, Affiliation, and Queer Internationalism”, Julia C. Bullock, Ayako Kano, James Welker, ed, *Rethinking Japanese Feminisms*, University of Hawaii Press, 2017, pp.187-204; Michiko Suzuki, “The Translation of Edward Carpenter’s The Intermediate Sex in Early Twentieth-Century Japan”, Heike Bauer, ed, *Sexology and Translation: Cultural and Scientific Encounters across the Modern World*, Temple University Press, 2015, pp. 197-215
- (50) ポール・ラッセル著、米塚真治訳『ゲイ文化の主役たち：ソクラテスからシニョリレまで』青土社 1997.1、p.65
- (51) 青山菊栄訳「中性論」『番紅花』1 (3)、p.14
- (52) 同上、p.7
- (53) 青山菊栄訳「中性論」『番紅花』1 (5)、p.68
- (54) イギリスでは、1885年の刑法改正法（Criminal Law Amendment Act）の成立以後、男性間の性行為が「著しい猥褻行為（gross indecency）」という名のもとに軽犯罪として取り締まられる。
- (55) 神近市「編集室にて」『番紅花』1 (3)、1914.5、pp.157-158
- (56) 同上
- (57) 同注 49、p.21
- (58) 上原早苗訳、イヴ・K・セジウィック著『男同士の絆：イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会、2001.2、p.330
- (59) 同上、p.330
- (60) 同上、p.334
- (61) 同上、p.329
- (62) 同上、p.327
- (63) 同注 21、p.4
- (64) 青山菊栄訳「中性論」『番紅花』1 (4)、p.150
- (65) 1912年に石川三四郎はカーペンターの思想を紹介する『哲人カーペンター』（東雲堂書店）を著した。
- (66) 同注 6
- (67) 水田珠枝「レスター・ウォードの「女性中心説」の受容」『比較文化研究』29、2010.3、pp.19-21
- (68) 同注 49
- (69) 神近市子「同性恋愛の特質」『新小説』1921.1、pp.74-78；『新小説』「古屋登代子「同性愛の女子教育上に於ける新意義」『婦人公論』7 (8)、1922.8、pp.24-29
- (70) 同注 49；そのほか、Michiko Suzuki, *Writing Same-Sex Love: Sexology and Literary Representation in Yoshiya Nobuko's Early Fiction*, The Journal of Asian Studies, vol.65, no. 3, 2006.8, pp. 575-599 も参照されたい。
- (71) 同注 6